



もしもし  
パン屋さん



みずきあかね

町の外れにある森の中に、小さなパン屋さんがありました。

まっ赤な屋根に自慢の木の扉を開けると、ふんわか香ばしい匂いがします。レジがあるカウンターには奥さん手作りの赤くとろりとした苺のジャムやスグリのジャムが並んでいます。パンに挟んで食べると口の中がとろけちゃいそうだと評判なのです。カウンターの右の棚にはたくさんさんのパンが並んでいます。長いパンにクリームをはさんだものや、パイ生地に森で取れる果物をどっさりのせたデニッシュ、シチューにぴったりの白いパンはさっき焼けたばかりで湯気をほんわり漂わせています。この棚は奥さんのためにご主人が作ったのですよ。

パンにはご主人が選びに選んだ材料をおしげもなく使っているの、味には自信があります。パンに使う小麦粉は北の大地ですくすくと育った元気な物を、塩は南の海で取れたちょっとやわらかな味がする物を、卵は近所の農家で放し飼いになっている鳥さんから分けてもらっています。

パンを焼くオーブンも電気を使った最新のものです。

知る人ぞ知るおいしいパン屋さんだと評判なのですが、実のところあまり売れません。

「きっと森の中だから売れないのよ。町で売ったらもっと売れるにきまつてるわ」

奥さんは電卓をたたきながらため息をつきました。町生まれの奥さんは、たまたま町に売りに来ていたご主人のパンに惚れ込んで、是非お嫁さんにして下さいって結婚を申し込みました。まさかこんな森の中に店があるなんて思いもしませんでした。

「まあまあ。園部さんの喫茶店においてもらってるからそれなりに売りあげはあるし、お店にも常連さんが来てくれるだろ？ 充分だよ」

常連さんの喫茶店にも置いてもらっていますが、二人で食べていく分で精一杯です。奥さんは電卓に並ぶマイナスをじっと見つめました。

「お隣の農家さんから分けて頂いているから野菜は安く変えますけど、電気代がまた高くなったの。バターも高くなったし。このままでは材料を買うお金がなくなってしまう。もしも電気が止められたら、おいしいパンを作れなくなるわ」

たしかにそうだけどね。反論しようか困ってしまったご主人は、奥さんが入れてくれた熱い紅茶をふうふうしながら黙りました。

次の日。お昼ご飯を自分が作ったパンで軽くすませて、ご主人は森の中に出かけました。森の中には胡桃が落ちていますし、今の時期は野いちごが採れます。材料費を少しでも浮かせるつもりなのです。

木漏れ日がチラチラと上から降り注いで肩や腕や地面に小さなお日様があるようです。ぷんと落ち葉の匂いがします。もう少し奥の方だったかな、野いちごの場所を思い出しながら歩いていると、

「もしもしパン屋さん」

声がありました。ずいぶん下の方から聞こえてきます。なんだろうと思って足下を見てみると、小さな子狸と大きな親狸がズボンの裾を引っ張っていました。

「もしもしパン屋さん。あなたの作るパンを一つ分けてもらえませんか？」

狸が二本の足で立って子狸の頭を撫でていました。ご主人はビックリ。だって狸が喋る、なんておとぎ話みたいなことがあるわけないと思っていましたから。毛むくじらの狸はくりくりのおめめをもっと丸くしてご主人の返事を待っているようでした。これは夢だ。きっと森の中で疲れて寝てしまったんだ。どうせ夢なら返事をしてもかまわないだろうとご主人は思いました。

「お店の方に来てくださるなら、差し上げますよ」

「しかし、あなたの奥さんは狸がお好きじゃないようで、パンを買いに行ったのにハウキで追い出されてしまいましたよ」

そう言われてご主人は思い出しました。そういえば店の中に狸が入ってきて大変だったと言っていたな……。

「葉っぱの金では失礼だろうと落ちている金をせっせと貯めて行ったのですがそのような次第でがっかりしておったところです」

それは気の毒なことをしたとご主人は思いました。

「では私が今注文を伺って、明日にでも配達に参りましょう。どんなパンにいたしましょう？ とろとろのカスタードクリームが入ったクリームパンですか？ 春の苺を煮詰めて作ったジャムがぎっしり入ったジャムパンもありますよ。季節の果物と生クリームでデコレーションしたデニッシュもおすすめです。今の季節はメロンですね。甘いものがお好きでないのなら、お野菜のクッキーはいかがですか？ 中にかぼちゃを練り込んだパウンドケーキも扱っていますよ。あと僕がいっとうお薦めなのはコロッケパンなんですけどね」

「コロッケパン！？ どんなパン！？」

子狸が目をきらきらさせながら伸びをしてご主人の顔をのぞき込みました。

「揚げたてのコロッケにソースの味を付けてキャベツといっしょに挟んであるんですよ」

子狸の口からヨダレがだらだらと流れ落ちてきゅうきゅう鳴きながらくるくるとかけまわりました。

「ほほ、孫はそれがよいらしい。ではパン屋さん。コロッケパンとあと、おすすめなのを五つばかり届けてくださらんか。お礼は必ず致しますので」

ご主人はポケットに入れてあったメモ帳に『コロッケパン、あと5つ。狸様』と書きました。売り上げが多くなるのはうれしいのですが、拾ったお金ではちょっと気が引けます。

「実は僕、パンの材料を探しに来たんです。でもなかなか見つからなくて困っていたんです。も

しよかったら胡桃や野いちごをパンの代金としていただけませんか？」

「なにそんなことでいいのか？ おやすいご用だ。他の物でもかまいませんよ。パンには粉やら卵やらいろいろいるのでしょうか？」

「できたら森の中にあるものでお願いできませんか？ くれぐれも人間から取るなんてことしないでくださいね」

いくら夢の中でも狸たちに泥棒をさせるのはいやだと思ったパン屋さんは念を押しました。狸たちは頷いて、森の中に消えていきました。

家に帰ってきてから、もう一度メモ帳を見ってみました。そこにはちゃんと『コロッケパン・あと5つ 狸様』の文字がきちんと書いてありました。

「夢じゃなかったのか」

驚いたご主人でしたが、それより狸が好きなパンを考えるのが楽しくて、明日が待ち遠しくなりました。

次の日、ご主人は奥さんに森に行くと言い残して、こっそりかくしておいたコロッケパン二つとクリームパンとジャムパン、それにかぼちゃのペーストを練り込んだデニッシュパンを袋に詰めて出かけました。

森の中を歩いていると、昨日通った道に出ました。そして、がさがさと音がして向こうの茂みから昨日の狸たちが出てきました。

「もしもしパン屋さん」

「ああ、お会いできて良かった。ご注文のパンですよ」

パン屋の袋を狸の前に置くと、狸はすっと二本足で立って袋を器用に開けました。

「おお、これはこれは美味しそうだ。ではいただくとしよう」

そして狸たちは前足を器用に使ってクリームパンを取り出すと、いただきますとこっくりうなづいてはぐはぐと食べ始めました。口の周りにはクリームがぺっとりとつきましたが、全く気にしていないようです。子狸は顔より大きなコロッケパンを取り出そうと格闘していましたから袋の中から出してやりました。子狸は丸い目をもっとまん丸にしてコロッケの部分を食べました。そうしているうちに匂いに釣られてきたのか、あちこちから狸が現れました。総勢十匹！ ご主人はなんだかおかしくて笑いを堪えながら自分のパンを美味しそうに頬張る狸たちを眺めていました。

「ごちそうさま。他のパン屋に比べものにならないくらいおいしかったですよ」

「それはありがとうございます」

「お約束のお品は後ほどお店の方にお届けしますから、暫くお待ちを」

食べ終わった狸たちは一礼すると、

「今度はパウンドケーキとやらを食べてみたい物ですなあ」

といいながら、森の中に消えていきました。ご主人はなんだかいいことをしたような気がして心が躍るようでした。あの子狸の必死にかぶりつく姿といたら。本当に可愛かったなあ。なん

て考えていたので、お代のことを忘れてお店に戻りました。

ご主人は次の日も注文を取りに行き、次の日にはパンを届けました。数日後には胡桃や野いちごがどっさりと届きましたので、奥さんがビックリしていました。

そんなことが何回かあったある日、お店に戻ると奥さんが困った顔をしていました。「変な電話があったの。もしもパン屋さん、デニッシュをとどけて下さいって」そしてメモを見せました。『デニッシュを配達？』それを見てご主人はすぐ狸たちのことだとわかりました。

「あなた、もしかして配達をなさっているの？」

「あ、ああそうなんだ。実は今日配達をして欲しいと頼まれて森まで行ってきたんだ」すると奥さんは嬉しそうに笑いました。

「まあそうだったの。それでお代は？」

「かわりに胡桃や野いちごをいただいているんだよ」

「あれがそうなの？ 困りますわ。お金でないと」

奥さんはまた困った顔になってしまいました。お金のことは大事なことです。でも狸たちのことを話してもわかってもらえないような気がして、

「今度はちゃんともらうから」

じんわりと額に汗をかきながら、ご主人は奥の厨房に逃げました。

次の日、注文のデニッシュを持って森に行きました。程なく狸が出てきました。

「こんにちは。ご注文のお品を届けに参りましたよ」

すると狸は首をかしげました。

「私どもは注文しておりませんが」

「店の方に電話がかかってきたと妻が……違うのですか？」

大変です。もしかして人間のお客様だったかもしれせん。すると、

「それを頼んだのは私よ」

と上の方から声がしました。そしてするするとなにかが木を伝わって降りてきました。

「これはこれは、猿さんでしたか」

「木の実をあげればパンをくださるって聞いたので、お電話してみたのですわ」

猿はそう言いながらご主人の手の中にある袋をじっと見ていましたが、猿に袋を渡しました。猿は中からデニッシュを取り出すと小さくちぎりながら美味しそうに食べました。

「何かお困りの件でも？」

狸がたずねるので、ご主人はため息をつきながら話しました。

「実はうちの奥さんがね。お金でないと困りますって言うんですよ。バターが値が上がっていてそのうちバターが買えなくなるんじゃないかって心配しているんです。ああでもあなたたちのパンはちゃんと配達しますよ。木の実は本当に助かるんです」

ご主人はにこっと笑いました。すると狸はううむと考えました。

「奥方が言うこともごもつとも。人間社会という物はお金がないと困るそうですからな」

「あれのどこがいいのかわかんない。固くて臭くて冷たいんだもん」

猿はクリームが付いた手を舐めながら言いました。可愛い動物たちのためにパンを焼くのはとても楽しいので、配達は是非続けたいけど、奥さんもお店もちょっと心配で困ってしまいました。その時です。

「なんかいいにおいがするぞお」

のんびりした声がしました。ふり向くとそこにクマが立っていました。ご主人はビックリしてとびあがってしまいました。食べられるかと思ったその時、クマは猿の方にくんくんと鼻を寄せました。

「これは甘くていい匂いだ。この匂いは知ってるぞ。これはあれだ。うんあれだ」

クマは一人でそう言いながらくるりと向きを変えるとまた森の奥へと行ってしまいました。ご主人は食べられなくて良かったと心底ホッとしました。

数日が経ちました。しばらく注文がないなあと思っていたある日のこと、電話が鳴りました。

「もしもしパン屋さん。大変大変。すぐに来て。ハチミツパンを持ってきて。いっぱいよ！」

と言いました。また猿だなどご主人は思いました。

「わかりました。では今から行きますね」

ご主人は猿の慌てっぷりに首をかしげながら、店番を奥さんに頼んであるだけのハチミツパンを袋に入れて店を出ました。ハチミツパンは花の香りがするハチミツを生地にたくさん練り込んだ上に焼きたてにハチミツソースをとろりとかけた甘い甘いパンです。

何があったんだろう。ご主人は心配しながら森の中に入って行きました。するとすぐに、

「パン屋さん早く早く」

猿が木の上から降りてきてご主人の前に立つとすぐに走り出しました。走りづらいけもの道を必死に猿に付いていきました。すると程なく大きな広い広場に出ました。そこにはたくさんの箱があってそこに黒いクマが手を突っ込んで舐めていました。まわりを怒ったハチがぶんぶん飛んでいます。どうやらハチミツを盗んでいるようです。

「あれって人間の持ち物でしょ？ 森の中の誰かが盗んだらパンを配達してくれなくなるんですよ？」

猿は言いました。ご主人は困ってしまいました。クマはさすがにこわいのです。

「クマさん！」

猿の声にクマがこっちを見ました。ご主人はちょっとふるえてしまいました。

「んんん、おいしいにおいがする」

「パン屋さんがね、パンを持ってきてくれたのよ。美味しいわよ」

猿に促されてご主人は袋の中から一つパンを出してみせました。

「これはね、特別なハチミツを使ったパンなんだ。食べてみたくない？」

クマはのっそりこちらに歩いてきて、ハチミツだらけの手を差し出しました。そこにご主人はパンを一つのせてやりました。

「どうぞ」

クマはちょっと眺めていましたが、それをぱくりと口に入れました。そしてもぐもぐ食べるとまた手を出しました。そこにパンをのせてクマがそれを食べて、最後のパンを食べ終わった時、「ああおいしかった。またくれる？」

クマは言いました。ご主人は大きく頷きました。

「ここにある箱のハチミツを食べないって約束したらね」

「しないよお。パンを食べられるならもうしないよお」

と両手で目を隠してごめんなさいをして、クマは森の奥へ行ってしまいました。

その時、

「ああ、あの、ありがとうございます」

声を掛けられました。ふり向くと、作業着を着た男の人でした。きっとこの蜜蜂の持ち主でしょう。

「あのクマにはハチミツを取られてとても困っていたんですよ。追い払ってくださってありがとうございます」

「いえ、そんなことは」

ご主人が頭をポリポリとかいていると、

「もしかして、森の中のパン屋さんですか？ これも何かのご縁です。もしよかったら、ですが、うちで取れたハチミツをお分けいたしましょうか？ お安くしますよ」

「いいんですか？」

「もちろんです」

ご主人はうれしくなって、飛び上がってしまいたいほどでした。

次の日、店の前を掃除しようとした奥さんはビックリ。いろいろな木の実と一緒に大きな木がありました。でもご主人にはわかりました。きっとクマさんのお礼です。

「それにしても大きな木だなあ。何かに使えないかな？」

ご主人はしばらく考えていましたが、そうだ、と、手を打ちました。

「薪でパンを焼けばいいんだ、それなら電気代も気にせずに済むじゃないか」

それからご主人は店の中にあった最新のオーブンを売って、そこに石を組んで石窯を作りました。奥さんは最初怒って口をきいてくれませんでしたでしたが、最後には石窯作りを手伝ってくれました。

石窯が出来て初めての火入れの日。

クマさんが持って来た材木を切り出した薪に火を付けました。赤々と燃える火を見ながら、ご主人はいいパンが焼けますように、と、お祈りしました。

それからパン屋さんはどうなったかって？

もちろん、森の中でパンを焼いているのですよ。石窯にようやく慣れてきたところで、前より種類は少なくなりましたが、とても美味しいパンを焼いています。最近ではくまさんが大好きなハチミツがたっぷり入ったパンが評判になって、町からの注文もたくさんはいるようになりました。ご主人も奥さんも大忙し。

でも合間を縫って、ご主人は動物たちへの配達をするのですよ。もし行かないと、動物たちから電話がかかってくるんです。

「もしもしパン屋さん」

って。

ほら、森の中から、パンが焼けるいい匂いが、してきませんか？

おしまい